

パネリスト

あん・まくどなるど

平沼 孝啓

吉岡 崇仁

長谷川 尚史

コーディネーター

柴田 昌三

総合討論



柴田 それでは続きまして、講演をいただいたお二人の先生にも壇上にお上がりいただいて、ディスカッションに参加していただきたいと思います。

最初に申し上げましたように、この事業計画「木文化プロジェクト」は二〇〇九年度、今年度から始まったものです。最上流部における山の伐採、間伐というものも、今年度始まったところです。この事業計画は五年ですけれども、その中でまず、伐る前の状況把握と実際に伐っていく行程に、今あるという状況です。期待される成果とか、全体像が見えてくるのはまだ大分先になりそうです。それから、五年で何が見えるのだという話もあります。これにつきましては五年で終わることはできないわけで、お金は五年でとりあえず切れそうですが、何とか継続して、お金をかけずにできる方法も考えていかなければいけないという事業になっています。

それでは、先に進めたいと思います。まくだなるごさんには、我々三人の日本語が早口すぎて分かりにくかったかもしれない。少しは、京都大学が今やろうとしていること、どういう研究を始めたかはわかってもらえたと思います。何かコメントを

いただけますか。

まくだなるご コメントというよりは質問です。十五年前に農林水産省とJ Aが「全国環境保全型農業推進会議」というものをつくって、メンバーの一人として今でも委員を務めさせてもらっています。その大きな目的は、農法によって自然界に与える負荷を考え、ひとり一人の農業者が責任を持って、プロフェッショナルに考えて農産物を作ってくれるようにということです。海の問題では、「森は海の恋人」なので、森林管理も非常に大事だと思っております。それをつなぐ「間のもの」、それが「敵」だと思ったりする場合があります。そのところをもう少し、吉岡先生にお聞きしたいと思います。その間の都市、人間活動のところだけではなく、やはり農業をなんとかしなければ、森林だけではきれいな海はつくれないと思うのです。そのところをこのプロジェクトではどうしようとしているのか、もう少しお話しただけたらと思います。

柴田 「森川海」ではなくて、「森里海連環学」になっているの

は、まさにその「里」の部分も考えなければならぬだろうという思想が入っているからなのです。実際、里は、まくどなるどさんとも言われたように、非常に大きなインパクトを与える空間です。それは人間活動そのものでもあります。吉岡先生からは、解決策にたどり着けるかどうかは別にして、現実問題としてどうなのかは考えざるを得ないというお話をうかがいました。まだ始まったところなので答えに困るかとは思いますが、吉岡先生、お話しいただけますか。

吉岡 「間のもの」というのは、農業の影響ということだと思います。

たとえば琵琶湖で言いますと、濁水問題というのがあります。いわゆる代かきの水を垂れ流しすることで、琵琶湖に大量の土砂が流れ込むという現象です。その時に、栄養塩であるリンとか、あるいは農薬なども洗い流されるので、農地としてはいいのですが、琵琶湖としては環境破壊につながるという問題です。

私自身が研究をしたわけではなく紹介になりますが、総合地球環境学研究所のプロジェクトがそれに特化した研究を行い

ました。代かきの水の垂れ流しというのは、朝に蛇口をひねって、勤めに出て、夕方帰ってきて締める、こういうやり方が普通だったのですね。そうすると昼間のあいだ、水が水路からスーと流れっぱなしになります。それで、濁水が排水路から琵琶湖に入るといわけです。

農家の方たちにそういう現状、あるいは自然科学的な情報を与えることによって、代かき時の水の管理の仕方を変えれば、これだけ琵琶湖の水が良くなりますよというようなことをフールドバックするわけです。自然科学者が、琵琶湖は今こんな状況ですよと示して、ワークショップを開いたりする。そうすると、農家の方たちも考えて、「それじゃいかんから、やつてみようか」という実際の行動につながるということがあります。

それが、この由良川プロジェクトでできるかどうか。まだちょっと分からないですけども、そういう取り組みが可能であろうと思っております。もう一つは、具体的な取り組みにはならないのですが、農業だけではなくて、福知山とか綾部とかの町に住んでいる方、あるいは商工業をやっている方たちに、森林がいまどういう状況か、森林になぜ手を入れないといけないのか、

それによってどう影響があるのかということをお知らせした場合、その人たちが下流に住む者として、上流にどういうサポートができるのか。いわゆる水源税であるとか、下流が上流にサポートをし、上流は下流に恩恵を与えるというような関係性というものについても、このプロジェクトでは考えていけたらと思っています。それと、最後に申しましたけれど、それを通して「木文化」という流れができればというふうに考えています。

柴田 平沼さんからもお話をいただきましたと思います。私は、自ら木を植えようと考えた建築家に感銘を受けましたが、そういう視点から見て、山を守るということについて、どういう風にお考えでしょうか。

平沼 自分の専門とちよつと違いすぎて門外感がありますが、実は、たぶん皆さん、ご聴講されている方も、高い意識で「森里海」について考えておられる方と、僕みたいに少し距離感を持ちながら、そこでなされている研究成果とか、先ほど吉岡先生が「環境意識調査法」という本の話を読みました、やさしい

話から入っていくという方も多いのではないかと思います。

今の農業の話も、森も、里も、海も、自然とてこう全部つながっていて、その二つの部分だけが良くなっても、やはり仕方がないのだということが今日、よく分かりました。では、その連携をどういうふうにやってみようかというのを教えてほしいと思っています。

柴田 長谷川さん、山の側からでもいいので、何か。

長谷川 連携というのは非常にむづかしいお話だと思っています。「森里海」全体の連携ということ自体も、現在チャレンジしているところです。ひとつ、「山側だけでもむづかしい」というお話をさせていただきます。

森づくりと木をいかに使うかというのは、これまで完全に分断されていたのです。といえますのは、林業の現場の人間というのは木材市場に木を出すだけで終わっていました。そこに、製材所の方が木を買いに来て、それが工務店なりに行っていたわけです。つまり、山側の人間というのは今まで木材市場で木が

どれくらい値段で売れるかということしか意識していなかったのですね。ということは、その自分が育てている木は何に使われるのか。たとえば家を建てるときに、どういう部材として、どういう消費者に使われていくのかということにほとんど意識がなかったといえます。

ようやく最近、木材流通自体がムダが多いと分かり、国の取り組みで、木を直接工場に、という流れができつつあります。仁淀川の例でご紹介させていただいた、作業道がつくことによつて、直接工務店の方とか、建築家の方、あるいは家を建てようとする施主さんが山に入つてきて、木を見定めて、「自分の家は、この木が使われるんだ」というようなことを意識できるところになったわけです。逆に、山側の人間も、「あつ、この人に木を買ってもらおうのだ」と。「この人の家の柱になるのだ、だからちゃんと管理しよう」と。そういうような意識がよ



やく今、芽生えてきたところだといえます。

山の中では、川上、川下と呼ばれています。が、そういった両者をつなげることは、これからの動きとして非常に重要になってくるのではないかと考えています。仁淀川では、そういう意識がどう変わっていくかということも含めて、社会性という部分でアプローチしていきたいと考えています。

まくどなるど 社会性のところに興味があるので、長谷川先生に質問をさせていただき
ます。

私は九〇年代後半から、樹木のない地域に行くのが好きになりました。砂漠とか、極北地帯とか。一カ月、二カ月ほど行って、森のあるところに戻ってくる。そうすると、繁った森に圧迫感を感じたりします。

四国にはよく足を運びます。水が不足し

ている県と、水が余っている県があつて、水が不足している県では節約せざるを得ないのですが、いまだに水の争いをやっていたりします。地域の問題には、他県とのこと、上流、下流の人々のことなどいろいろありますが、水問題、森問題、上流と下流の人達の資源権利の問題とか、そういったものも含めて見たりはしていますでしょうか。

長谷川 視点は持つていますが、恐らくその辺りのことは、本当に地域の中に入り込んで、ある程度生活しないと本音は聞けないのではないかと自覚しています。そういう部分は、あくまでアンケート、聞き取り調査という形では計画しています。

柴田 我々、入り口に立つたところですよ。まくだなるどさんの基調講演にもあつたように、今しか見ないのはダメです。ですから、長谷川先生のスライドにもありましたけど、もともと棚田だつたところに植林されている。で、今行くと、すごくたくさん的人工林がある。それも間伐遅れの人工林ですからから、それを何とかしなければいけないと思うわけです。でも、実は50年

前は、そこは人工林ではなくて棚田が延々と続いていた。あるいは、あのエリアでは、さらにその上に焼き畑があつたとか、そういうエリアなのです。恐らく、そちらの風景の時代のほうが長く、それが過去四、五〇年の間に今の状態になつた。だけど、今はその人工林が大問題なので、それを何とか有用な資源として使おうという方向で、まず動かないといけない。でも、それが本当にあの地域のためになる話なのか、それも考えなければならぬと思います。人工林問題が解決した後ですけどね。そういう歴史という部分も無視はしてはいけないという気持ちを持ち出しはじめたところですよ。

恐らく日本全国、拡大造林という名目のもとに、それ以前の土地利用が、全部人工林に塗りつぶされている場所が結構あると思います。仁淀川と由良川、この二つの流域の調査結果がモデル化でき、シミュレーションできたとしても、全国展開するためには、その地域の少し前の状態、大昔ではなく、ほんの三〇年、四〇年くらい前の状態は知っておいた方がいいのでは、という意識を少し持つようになってきています。

長谷川 今日時間は時間がなくて、ご紹介することができなかつた

のですが、今回作業道を入れていただいている流域で調査をしていましたら、九〇歳のおばあさんが声を掛けてきました。「早く、道造つてよ」と。そのわけを尋ねましたら、作業道が予定されている一番奥に「がらく」という、昔集落の方が毎年お祭りをしていた場所があるのですね。そこまで下から歩くと、二時間ほどかかるのですが、その九〇歳のおばあさん、「もう一度、あそこへ行きたい」と。だから、元気でクルマに乗せてもらって行ける間に、道を早く造つてほしいということでした。

そういう文化を維持する上でも、森林管理で人が山に入っていくというのは非常に重要だということをすごく感じました。人工林を何とかするということだけではなく、そういう文化は一体どういうものか、山の使い方をこれからどうしていくのか、という部分も聞き取りとかで調査したいと考えています。

柴田 平沼さん、長谷川先生が「山側が川下に向かっていろいろ努力をし始めている」という話をされました。だけど、川下側から見てその努力は見えてきているかどうかを知りたいの

ですが。つまり、山のほうから木材を、売り込みに来ますか。

平沼 いや……(笑)。まだ僕なんかには見えていなくて。山つて、すごく奥深いものですから、なかなか下流までは届かないのじゃないかな。

それと、やはりそんなにすごくむつかしいものなのですかね？
二つを解いていくのに。いい加減な話をするとう怒られそうですけど、吉岡先生の環境意識の調査の話をうに、普及法みたいなものをひとつ、大きく分かりやすく作られて。それに対して、僕たち扱う者達にはまず、「あつ、こうなるとこうなるんだよね」という入り口くらいから教えていただけるような、そういう方法は、もう出ているのですか、すでにあるのでしょうか。柴田先生、どうですか。

柴田 なぜ、あえてこの質問をしたのか。たとえば、京都府の某委員会とかでそういう話が出てくるのです。住宅を造っている人と森林組合の人が、同じ会議の席に着く。お互いに、地元産の木材を使うために、あるいは使ってもらうために努力をし

ている。お互いに努力を披瀝し合うのですが、全然交わっていない。お互いに、「どうして相手は俺たちの努力を理解してくれないのだろう」と物別れになってしまう。どちらも、マーケットが共通にあるべきだとかいうことは、意識としてはあるのだけれども、その持ついき方が全然違う、というのがよくあります。で、結局、すれ違い。

我々が、今やろうとしていることも、実際に木質製品を山から出して使ってもらうことを前提に、そのすれ違いに対する解決策を考えないことには、結局山は疲れたまま、木は高く売れないというような状態が続いてしまうわけです。ちゃんと高く買ってもらえるにはどうしたらよいのか。「言え、買ってやるよ」と、平沼さんサイドの人達は言うのですが、なぜかそこに結びついていかない。それも、我々の大きなテーマだろうと思つていきます。いや、何かよい例がないかと思つて聞いたのですが、やはり、ムリですか。長谷川先生、どうでしょうか。

長谷川 川上、川下という部分で考えるときに、すごく気になるのが、山の時間と川下の時間というのが全然違うということ

です。川下で言われたことを、じゃあ山で作ろうかと決めて、作っているうちに世の中変わつてしまつて要らなくなる。川下で、今こんな材が必要だということで、山に探しに行く。その結果、山が皆伐されてしまうという状況が起こる。それを解決するには、やはり山側がすごく柔軟にならないとダメだと思います。さらに、先を読むという見方ができないとちよつとむづかしいのかなあと。川下のほうも、競争競争というカタチで変わっていくのではなくて、ある程度安定した社会、ひとつの方向性を安定させないと、やはり山に負荷がかかつてしまうのかなあと、そんなふうに考えています。

柴田 そろそろ、会場のほうでも発言をなさりたいと思つていられる方おられるのではと思います。この時計台集会では、これまで最後の一時間は、会場と対話をおこなう時間と位置づけてきました。これからの進行は天野礼子さんをお願いいたします。